

第二節 生業

沖永良部島の古代の人々は何を食べて生活していたのであろうか。

現在のように米を常食とするようになったのは、もちろん新しいことである。それ以前は、さつまいもなどを

多く食べていたのであろうが、さつまいもが沖永良部島にはいなかったのは、せいぜい数百年余り前のことではかないであろう。その前はどんな食事をしていたのであろうか。

食事の問題をつきつめていくと、つまりは農業がどのように発達してきたかという問題になってくる。いま使っている水田や畑地も、以前は低湿地であったとか、山であったとか、あるいは原野や荒地であったとかいう場所がかなりあるはずである。また、それを記憶しておられる方もあろう。現在、水田や畑地として使用している耕作地のうち、第二次大戦以前も耕作地であったもの、また、明治時代以前も耕作地であったもの、さらに、江戸時代以前も耕作地であったものというように、いわば耕作地の歴史をたどっていくことができれば、はたして古代にはどれほどが残るであろうか。

ところが、古代の耕作地は意外に広がったのである。それは、古代の農業が焼畑農業にかなり依存していたと想定されるからである。焼畑農業とは、森林や原野を伐採して焼き払って、耕作地をつくり、そこで一定の期間作物を栽培したのち、その耕作を放棄して、耕作地を他

に移動させる粗放な農業である。このような農業では、山や原野が数年の間は耕作地として利用されるが、そのあとは放棄されるので、そこはまたやがて山林や原野にかえることになる。したがって、現在のような半永久的な耕作地とはその概念を異にしている。

日本史では、一般的には弥生時代以降、水田稲作が始まったと説かれている。紀元前三世紀ごろである。ところが、焼畑耕作はそれ以前から行われていた可能性がある。それは焼畑耕作が水田耕作より原始的農法であり、水田耕作以前からあった農法と考えられるからである。すなわち、焼畑耕作では、焼き払うという開墾方法が行われること、焼き払うことで灰が生成され、また焼土効果によって速効的な肥料効果をあげること、さらにそれが、雑草の根絶にかなりの程度役立つということなど、いずれも低い技術段階にある農民が農業を営む場合、焼畑耕作がもっとも適応した農耕形態とみられるからである。鋤・鋤などの農具らしいものもほとんど必要としない。それは、焼畑耕作では畝をつくったり、土地を耕したりなども一切しないからである。それほどに原始的農法なのである。

焼畑耕作では、もちろん水田や常畑（永久畑）ほどの収穫は望めない。したがって、土地の条件の良い所は水田や常畑にし、多くは傾斜地などを利用して焼畑が開かれることになる。

そこで、沖永良部島でも古くは行われていたとみられる焼畑耕作について、以下に少し述べてみたい。

永吉毅氏が、地名の研究から沖永良部島でもかつては焼畑があったことを想定されていることは注目される。氏はキナ（木名）系の地名がそれにあたるとして、次のように述べている。

「キ」はこの「毛」つまり一毛作、二毛作という場合の「毛」と同一語で、地上に生えた草木を意味し、「ナ」はナイ（地震）、ウブスナ（産土）の「ナ」と同じく土地の義である。それで「キナ」とは、つまり「草木の生えた場所」ということである。こういう場所では「火田式農法」がよく行なわれるので、転じてこの種の農法の名として用いられるに至ったのである。火田はまた焼畑ともいい、山野に自生している草木を焼き払い、その灰を肥料として、特別耕すことも施肥をすることもせず作物を作り、数

でも行われていた。

焼畑耕作の歴史の実態を具体的に知ることは、いまではきわめて困難である。それでも、その一端を知ることができる資料がある。それは、「鹿児島県農事調査」である。「鹿児島県農事調査」は、その刊行に努力された原口虎雄氏の解説によると、前田正名が明治二十三年一月農商務省次官に任命されたときに始めた全国的な調査で、鹿児島県の分についていえば、勸業に熱心であった渡辺千秋知事辞任の明治二十三年九月初めまでには大方の作業が終わり、大迫貞清知事明治二十五年十一月（二十七年一月在任）のときまでに進達されたものである、という。

「鹿児島県農事調査」は、その名のとおり農事全般についての調査であり、それも全県にわたっていることから、一八九〇年（明治二十三年）という時点における農業事情を知ることのできる貴重な資料となっている。ここでは、とりわけ県内各郡別に記された田地・畑地・切替畑地の面積が参考になる。切替畑地とは焼畑地のことである。これによってみると、

大島郡は、

年して地力が尽きれば放棄して他に移る原始的農法で、野原と丘陵地帯との間にある緩傾斜地や段丘でよく行なわれた。（沖之永良部島地名考）

以上のように述べられたあと、キナ系地名として、村落名では、

知名・久志検・手々知名・瀬名・田皆

などを指摘され、ほかに小字名をあげ、和泊町に属するものとして、

湾^ワ仁^ニ屋（和泊）、アンニヤ、木場野・吉^{チシ}辺^ビ名（喜美留）、喜野口・湾仁屋（国頭）、伊地野（西原）、アンニヤラ俣・木^ゲ武^テ手^テ名（畦布）、朝知野・田^タ皆^ケ窪（皆川）、糸知名（内城）、田知木名（後蘭）、良木屋（谷山）、佐木名・内喜名（永領）、内喜名・玄寺（瀬名）などをあげている。

このような場所では、おそらく古くから焼畑耕作が行われていたのである。また、そのなかの一部では、近世・近代にいたるまで、焼畑耕作が行われていた可能性もある。焼畑耕作は、いまでもほとんど見られなくなつたものの、かつては、日本各地で古くから広く行われ、地域によっては、明治・大正時代をへて、昭和時代になつ

ても行われていた。

| | |
|------|------------------|
| 田地 | 三千九百四十六町四畝二十七步 |
| 畑地 | 一万三千八百八十町八反七畝十四步 |
| 切替畑地 | 二千四百二十四町七反八畝十一步 |

となつている。

この調査では郡以下の町村別記載がないので、大島郡内の各村の状況までは明らかでないが、郡全体の概況は知ることができる。すなわち、大島郡では、明治二十三年の段階に二千四百二十四町余の焼畑耕地があり、耕地全体の十二・四パーセントをしめていた。この数値は、鹿児島県全体の焼畑耕地の割合が二十一・四パーセントとなつていることからすると、その比率は低いことがわかる。

焼畑耕地や経営農家数が統計的に全国規模でわかるようになるのは昭和期になってからである。一九二六年（昭和十一年）の山林調査によると、鹿児島県の焼畑耕地面積は、全国五位で二千七百六十三町となつているが、経営農家数は三万八千五百戸で全国一位となっている。この二つの数値からすると、鹿児島県の場合は小規模な焼畑経営の戸数が多いのが一般的傾向であつたとみられる。

大島郡関係の焼畑についての資料は希少で、推測を多く

はさむことになるが、大島郡内における焼畑経営も小規模なものが多かったのではないだろうか。

ところで、古代の沖永良部島の焼畑ではどんな作物がつくられていたのだろうか。この問いに対して明解な答えを出すことはできないが、ここでも推測を試みると次のようになる。

最近まで本土のごく一部の地域で行われていた焼畑における作物を付面積から見ると、

ソバ・アワ・ヒユ・麦類・大豆・小豆・甘藷・サト

イモ・ナタネ・トウモロコシ

などが主なものである。

このなかで、沖永良部島で主に栽培された可能性のあるものは、アワとサトイモではなかったかと思われる。というのは、アワはインドの原産で、インド東部のアッサム山地や南シナの山地で多く栽培されているし、台湾の山地焼畑の間ではもっとも重要な作物になっている。また、沖縄の焼畑でも古くからアワが栽培されていた。このような状況からすると、沖永良部島でも、焼畑ではまずアワの栽培が想定される。

サトイモは、東南アジアでタロイモとよばれるイモの

一種で、熱帯の多種類のイモ類の中から、南シナから日本にかけての地域で早くから栽培されたものである。特に、九州山地の焼畑では最近まで広く栽培されていたので、イモといえばサトイモを指すほどになっている。また、一部では甘藷も栽培されていたが、甘藷が導入されるまではサトイモが主要作物になっていたとみられる。

したがって、沖永良部島でもサトイモを想定してみたのであるが、いかがであろうか。

次に、焼畑農業が主な耕作方法となっている場合の社会の特色について考えてみたい。

焼畑農業では、耕作地をつくる場合には森林や原野を伐採して焼き払うことと、そこで一定期間作物が栽培されると、耕作を放棄して耕作地を他に移動させるという耕作方法がとられる。このような農業では、厳密な意味での土地の私有観念は生じにくい。というのは、いまでも焼畑農業が行われている東南アジアでは、伐採や火入れ、播種^{はしゅ}などが共同労働で進められる例がきわめて多いという。共同労働は村落共同体で行われる場合もあるし、それ以下の小集団のこともあるが、世帯単位をこえて行われるのが普通である。

また、耕作地は数年間利用されると放棄して移動することから、ある特定の土地を占有するという考え方は生じにくい。それに、耕作地を無制限に拡大することは、実際には除草作業が過重になって耕作を不能にするため、耕作面積にはおのずから限度ができてしまう。東南アジアの焼畑農業では、村落を単位とする土地共有制の原理がはたらいっているというが、それもこのような焼畑農業に固有な特性を考えると理解できるのではないだろうか。

ところで、焼畑農業を主とする村落共同体では、その中から卓越した経済力をもつ有力者が出現するということはきわめて考えにくいことである。したがって、このような社会では、上下にあまり隔差のない村落構造を想定してよいのではあるまいか。

この節の執筆にあたっては、部分的に
佐々木高明「稲作以前」などを参考に
させていただいたことを付記しておく。